

論壇時評

奥平康弘

〔下〕

軍備強化が言論の自由弾圧につながる

今月をもってこの時評も年を閉じることになる。そこで、年間回顧のようなものを書き加えたいと思う。

核武装論めぐって 内ゲバ的批判も

私がこの欄を引き受けたのは一昨年七月からのこと。今年七月半といつことになる。私が引き受けたころから論壇のなかには、かつてない強さで右寄りの偏向風が吹きはじめたのであったが、今年にはいつてからは、ポルテジが上がり放して、大げさにいえば歴史の局面が変わりつつあるという印象をもつ。一昨年には有事立法が必要かどうかか、防衛問題はそのようなタームから解放しようとかいつ議論が盛況したのであったが、今年には、防衛問題はタームとみるか、前面に押し出され、公然とソ連を潜在敵国と見なし、防衛力増強はあたりまえ、といった調子の論調が支配した。

こうしたなかで、森嶋運夫の非武装中立論はソ連にたいする利敵行為であって言論の自由の濫用であり、よろしく弾圧すべしと論ずる論文(那須聖「国益を忘れた防衛論文」)が、堂々「中央公論」八月号を飾ったのであった。これは防衛論が高まり、ナショナルリズムが高揚すれば、軍備が強化されるだけではなく、言論の自由を

せばめられたいことこそ、ほかならぬ「中央公論」が教えてくれたものとして、少なうも私は未ながく肝を銘じておく。

核武装論めぐって

内ゲバ的批判も



田中 義雄

「いついっただ状況をバックに、論壇の風見鶏といわれる清水幾太郎

が登場して来ないとしたら、かえって不思議であったかもしれない。よきにつけ悪きにつけ、清水幾太郎「核の選択 日本も国家たれ」(諸君、七月号)は、今年論壇で最大の話題になりおおせることができた。「経済大国」なら「軍事大国」になるのは当然であり、被爆国だから独自の核兵器を確保する権利があると主張する

防衛力増強が前面に

=この一年の動き= 憲法「諸悪の根源」論が流行

ベースに「戦後を疑う」も出版されるにいたっている。これからは、将来いつか、言論の自由や集会・結社の自由を縮減する政策がとられても不思議ではない。これを予感させるものがある。

極端論をベースに

コンセンサス作り

渡部昇一も西義之・小田晋の座談会「核の選択」から「夕暮まで」(諸君、十月号)で「回心」として矢張りかもしなければならない、清水さんはかつての平和運動から帰って来ただけだ。それなのに猪木さんや福田さんが喜ばないといいつつ「な、ほなななからよ」と奇訝な感じをもちますね」といっている。かれも「内ゲバ」とみているわけだが、単純にすぎない。清水の極端論を格好のベースにして、防衛論にかんじてコンセンサスを作ろうといっているが、これらは人びとの願ひなのである。日本兵器工業会会長の棚次宣正はインタビュー「安全保障私論」(コンタビエー臨時増刊、十一月二十日)で、清水核武装論を日向徴兵復活論などを「屈服してはいかん復讐論」に対して一つの強力なインパクトを与えた。インパクトを与えるには普通のことをいってむかひませぬから」と評述している。たぐみに極端論の効用を解説

黄金時代



スルバラン「牧者」

並んで本展がとも12月21日まで開かれている。前者は十五世紀から十七世紀の西歐美術の本流を示す待望の展覧で、後者はスвейン美術の黄金時代十七世紀を中心にした良質の作品展。両展をあわせれば、イタリアの性格やスвейンの氣質とは同様が、素通りできぬ。現在の私



第十三 藤井賞は、詩人には関係ない

おなじインタビュー「安全保障私論」で、根室市長の寺嶋伊津雄が「私は諸悪の根源は憲法だ」といっている。国民の魂の入っていない憲法でなく、国民性を盛り込んだ憲法でないかと思ってしまう。清水の「諸悪の根源」といっているのは、憲法を「諸悪の根源」とみている見方が公然と流行するまで国民は「これを知らされたい」と思っていること、大発見。これは藤原の発見でもなんでもないので、煽動的に書かれていないのだが、現時点で「諸悪の根源」の執行猶予(文芸春秋九月号)などがその現れである。政界では野政憲法論が耳目を集めた。奥野法相はさすがに憲法を諸悪の根源と明言してはいないが、その考えをいっているのは、この頃の端々からもうかえる。コンタビエー「安全保障私論」(コンタビエー臨時増刊、十一月二十日)で、清水核武装論を日向徴兵復活論などを「屈服してはいかん復讐論」に対して一つの強力なインパクトを与えた。インパクトを与えるには普通のことをいってむかひませぬから」と評述している。たぐみに極端論の効用を解説

「国民性」盛り込んだ 憲法の内容とは?

しかしながら、世界的な流れのなかで憲法の意義を見定め、そのはたきを冷静に判断もせず「これを「諸悪の根源」と見なして廃棄してしまいたい」という内容の「国民性」を盛り込んだ憲法を欲するといっているだろう。二の論文も、清水の問題作同様に、二三年半論壇時評を担当して

『面食らいながらも、ありがたく』と沢沢氏 龍井勝一郎賞など贈呈式

一方、第四回すばる文壇賞の贈呈式も九段下のホテルグランドパレスで行われ、吉米喜氏(受賞作「オキナム屋敷」、沖縄在住)に記念品(賞金五十万円)が贈られた。



黒板